

特集 「異分野」理解のすすめ

イスラームと利子

トルコ事情を考える

小田 壽典

話題

一昨年(1997)イスラーム派のエルバカン首相が無利子銀行を設立したと、NHK スペシャルで報道があった。利子の代わりに債権者へ現物給付をするものだと簡単な説明だったので、具体的仕組みを思い浮かべることができなかった。ただイスラーム法はトルコ社会にまだ生きているという驚きとともに世界の金融経済に対してどのように対処するか、さらにイスラームと資本主義は近未来に歩調を合わせることが可能かどうか問題を投げかけているとつよく感じた。エルバカン内閣は行き詰まり、ほどなく反イスラーム派のコルマズ政権に転換したが、ソ連崩壊後の世界情勢に、トルコの置かれた立場は重要ではないかと、漠然と考えて、過去にさかのぼる話題を提供したいと思っている。

1. はじめに

トルコの人びとは、中世の中央アジアにおいて、ウイグルと呼ばれた時代に、一時期、仏教を信仰していた。私はそれを研究している。仏教はインドに起こり、中国に伝わり、日本へやってきた。アジアの内陸部ではチベットに行われ、それからモンゴルの人びとへ伝えられたことも知られている。モンゴルはチンギス=ハンが国を開いた。源平の戦いで活躍した義経は鎌倉幕府から追われて、平泉で敗れると、大陸に渡りチンギス=ハンとなったと、まことしやかな伝説がねつ造されたけれども、その後13世紀後半に、博多湾へモンゴル(蒙古)が襲来したのは、れっきとした史実である。

ちょうどそのころ、中国の、いまの新疆ウイグル自治区 現在はイスラーム教の地 地では、トルコ族の一派であるウイグ

ル人の間に仏教が広まっていた。このことは、一般にあまり知られない。というのは、かれこれ百年前から第1次大戦にかけて、ヨーロッパそして日本も、アジア内陸部へ盛んに探検隊を送り込み調査した。いわゆるシルクロードの、とくに新疆のトルファン盆地や西北中国の敦煌などから大量の文書類が発見された。そのなかに古いトルコ語で書かれた仏教の経典類が見つかり、ウイグル人仏教の一端が明らかになったからである。その研究は、仏教だけでなく、言語学や古文書学、美術や遺跡について、すでに歴史から姿が消えて久しいマニ教なども含めて、イギリス、ドイツ、フランス、ロシア、中国、トルコほかの、それほど多くない研究者によって進められている。偶々1966年から翌年にかけてイスタンブール大学に留学し、トルコ語と歴史を学んだ。そこはイスラーム教の世界である。今日は専門から離れて、西アジアのトルコの現状につ

いてお話ししたい。

一般には、1997年にサッカーのアジア予選でカザフスタンやウズベキスタンと対戦してその国名を知るようになったといった方がよいかもしれない。ソ連の崩壊(1991)によって中央アジアに、ウズベキスタン(1991.8)、キルギズスタン(1991.8)、アゼルバイジャン(1991.8)、タジキスタン(1991.9)、トルクメニスタン(1991.10)、カザフスタン(1991.12)の6か国が新しく姿を現した。イラン系のタジキスタンのほかは、トルコ語を話す国ぐにである。さらに、中国からトルコにいたる、古代や中世の、いわゆるシルクロードに鉄道が連結(1996)されたことも少しくニュース性があった。トルコのイスタンブールのアジア側の駅ハイダルパシャから、イラン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、カザフスタンそして中国の東シナ海の連雲港までの列車の全通が報じられた。ただ鉄道が連結されたのであって、必ずしも常時列車が開通しているのではないらしい。そしてまたカスピ海油田・エネルギー資源の再開発も最近の話題である。中日新聞ではそれを1998年の正月の特集でとりあげていた。

要するにソ連崩壊によって、新しく中央アジアのトルコ系諸国がみえてきた。たとえば、東西ドイツの統一が第1次大戦後の分断国家の解消だったとすれば、このたびのトルコ系諸国の独立は、第1次大戦後の民族的分断が解消されたことを意味する。そして上述の国ぐにがイスラームの宗教を信仰していることがさらに注目される。世界の東西冷戦構造のなかで影に隠れていた部分がイスラームの原理主義運動をとまない、我々の目に衝撃を与えたが、さらにつけ加えるべきことは、1997年にかけてトルコにイスラーム主義派の政党が台頭し、党

首エルバカンが首相となって、彼の言動やトルコ社会の風潮は日本のテレビや新聞で報道された。ここではイスラームを話題にするつもりである。



トルコ言語集會にきた
中央アジアの人びと(トプカプ宮殿 1996)

2. トルコ共和国(1923 今日)

トルコ共和国は、第1次大戦後、トルコ革命によってイスラーム国家と性格づけられるオスマン朝トルコ帝国の殻を破り、そして独立戦争で西欧の軍事介入を排除し、民族国家として独立を達成した。そして西欧的憲法の発布、国民軍の創設、カリフ制・宗教法廷の廃止、寺院・学院・教団道場などの宗教的基本財の接收、政教分離、政党政治、女性のベール・男性のトルコ帽禁止、一夫多妻禁止、グレゴリオ暦の採用などのほか、国字改革(ローマ字採用:1928)および計画経済を断行した。この国家政策のなかで、大きな役割を演じた、ケマル・パシャは、アタテュルクすなわちトルコの父と賞賛され、その名を与えられた。大統領制にもとづく(1)議会民主主義と政党政治、(2)司法(憲法裁判所)、(3)国軍と内閣制は、1931年5月、アタテュルク大統領のもとに共和人民党の綱領であった共和政体・民族国家・人民主権・資本国家管理・俗権国家(世俗主義)・革命国家の諸原則(ケマルイズムといっている)が採択され、1937年に憲法修正のなかに盛り込まれたのである。しかしイスラームを排除するものではなく、民衆は



アタテュルク廟
(アンカラ)

墓石と守衛

信仰を護持した。それ以降、トルコ政府が国内政策でもっともおそれたのがイスラーム国家への回帰である。つまりイスラームが政治的イデオロギーとなることへの警戒であった。そのために俗権国家(世俗主義)を優先することが重要であった。ところが近年のトルコ情勢は、アフガニスタン紛争後の世界的なイスラーム原理主義運動がトルコの若者にイスラームへの政治的回帰を呼び覚ますものとなった。我が国においても昨年トルコの成りゆきが新聞・テレビで報道されたことは、記憶に新しい。

多少具体的に資料を引用してみたい。表1は総選挙の結果(ただし備考は筆者の注)である。1994年に正道党と共和人民党の連立政権ができた。世界のイスラーム主義が世論を動かし、1995年12月の選挙では、イス

ラーム派の福祉党が比較第一党になった。そのエルバカン党首に組閣が委ねられたが、組閣に失敗し、次に正道党のチルレル党首にデミレル大統領は命じた。これも成立せず、ようやく1996年3月に祖国党のユルマズ首相が正道党と連立したが、内閣の信任が議会から得られなかった。その間に地方選挙の躍進があつて福祉党が正道党と連立し、エルバカン新首相のもとに6月28日に新内閣は発足した。エネルギー資源の先行き不安を乗り切るために、イスラーム諸国の支援を期待することもあった。新首相はわが意を得たりと、狂信的な世論を助長する政策と行動にでて、国際関係に混乱を生じさせはじめた。1996年8月から10月に、^{フアナティク}イラン、パキスタン、シンガポール、マレーシア、インドネシアを歴訪(イランとは天然ガス輸入長期契約)、さらにエジプト、リビアなどを訪問した。リビアの訪問は国内外からの懸念を受けた。この内閣はクルド労働党(PKK)との内戦状態、連立政権の不安定、若者のイスラーム化傾向、エネルギー資源不足、インフレと地下経済、EU加盟問題、キプロスのギリシアとの確執などの多様な問題への適切な対策を実現できず、ついに翌1997年6月に辞任に追い込まれた。そのあとにユルマズ政権が成立して今日にいたる。

さらに1997年2月から1998年3月まで

表1 トルコ国会総選挙(『中東研究』1996.1, No. 410: 18-19)

政党名	得票率1995	1994	議員数	備考
福祉党	21.32	19.1	158	イスラーム派政党
祖国党	19.66	21.0	132	反イスラーム派保守
正道党	19.20	21.4	135	国際派保守(女性党首)
民主左派党	14.65	8.8	75	左派政党
共和人民党	10.71	4.6	50	中道左派
民族行動党	8.18	8.0	0	
人民民主党	4.17		0	
その他	2.11			



コジャテペ寺院（アンカラ）

トルコの動向

（『中東研究』より抜粋）をみると、表2のようである。1997年にはいると、首相の政治力はほとんど機能しなくなった。それに対して、イスラーム派の民衆、とりわけイスタンブルでは学生のデモが起こる。



地階スーパーマーケット



ドーム内正面キブラ

3. イスラームは法の宗教

イスラーム主義の問題

いったい何が問題なのか。我が国でも最近、問題意識の芽生えを感じる。たとえば、「国民国家とイスラーム」〔加藤博『中東研究』430, 1997. 7〕や『イスラームの国家・社会・法』〔訳書1996〕, 『イスラームと資本主義』〔訳書1998〕といった著作が目につく。社会主義イデオロギーが終焉した今日、議会制民主主義の国民国家と資本主義経済は法治国の当然の成りゆきであると我々は考えるかも

しれない。イスラームもそのパラダイムのなかで世界の政治や経済に組み込まれるとみるかもしれない。果たしてどうであろうか。そんなに簡単なことではないと考えたい。

「3人寄ればイスラーム教徒」という言葉がある。「みんなで渡ればこわくない」と我々自身を風刺する言葉と対照的なものである。「法を守るまたは法に服する」という観点からすれば、集団になるとムスリム（イスラーム教徒）は社会集団として法を遵守しないことは異端の表明となる。信仰告白のラーイラーヘイッラーラーフ「アッラーの他に神はなし」は、アッラーへの帰依が信仰の核である。それは同時に、イスラームの法によって固く裏打ちされていることを知らねばならない。イスラームには法を重視する歴史が存在するのである。

イスラームの歴史を見ると、西アジアの辺境民族アラブからでたムハンマド（マホメット570c-632）がはじめた。ちょうど日本では聖徳太子（574-622）の時代にあたる。

イスラームの法理念はイスラーム帝国といわれるアッバース朝の時代（750-1258）にほぼ完成したという。この理念を制度として確立したのがオスマン朝トルコ帝国（1299-1922）であった。そして第1次大戦後にこのイスラーム国家から民族国家すなわち国民国家へ脱皮を図ったのがアタテュルク（大統領）のトルコ共和国である。国民の大部分がムスリムである国がはじめて政教分離をめざした。それを世俗主義セキユラリズムと名づけている。

イスラーム主義とは、いったい何であろうか。私なりに理解するところを述べるにすぎないが、イスラームの始祖、ムハンマドとカリフ（後継者）の時代（632-661）、そしてウマイヤ朝（661-750）、アッバース朝（750-1258）において、簡単にいえば、国家と宗教は同心円的に発展した。国法はイスラーム

の法(シャリーア)そのものであった。ただ国家経営のために純粋に宗教法だけが有効であったのではないが、制度の中核は宗教法であった。その法源に



エルバカン首相
(1996.9.30 *Akşam* 新聞より)

は四つある。すなわちコーラン(アッラーの啓示)、スンナ(ムハンマドの言行:ハディース)、イジュマー(法学者の合意)とキヤース(類推)である。法学者が法官(宗教裁判所)となり、法秩序が維持された。法源の第一はコーランであって神与の法である。永久不変の憲法といってよい。しかし法の適用にさまざまな道ができた。法学派というイスラーム知識層に学派が生まれ、おもに4法学派(ハナフィー、シャーフイー、マーリキー、ハンバリー)と別派のシーア派にわけられる。

今のトルコの前身であるオスマン朝トルコ帝国は、ムスリムとしてイスラーム帝国の統治体制を引き継いだ。しかも支配制度として体制を整えたので、イスラーム国家と形容されている。(いまはイランがそのような性格の国家といえるかもしれない。)

オスマン朝トルコ帝国(1299-1922)の皇帝はスルタンと称されるイスラームの世俗的保護者、すなわちスポンサーであって、非イスラーム的内容の軍事体制が合法化された。のちには理念的に神の立法権も付与されていると考えられるようになった。それをカリフ制といっている。軍事体制の長官が大宰相(軍事・行政)であり、カリフ制度のイスラーム法の執行総責任者がイスラーム長官(ムフティー:教旨を下す者)であり、後者は司法、聖職、教育者の事実上の任免権をもった。このような制度のもとに、第10代スルタン=スレイマン(1520-1566)は立法者と呼ばれた。イスラーム法はシャリーア(宗教法)に加えて、皇帝の勅令によるカー

表2-1 トルコの動向(『中東研究』より抜粋)

1997年2月

エルバカン首相はベール着用案を撤回した。
デミレル大統領は、政治をモスクに持ち込もうとする者は、犯罪を犯していると述べた。
また首相と会談し、イスラーム化政策に懸念を表明した。
トルコの国家安全評議会はエルバカン首相に世俗政治の維持を要請した。

1997年4月

エルバカン首相はサウジの巡礼に出発した。
現エルバカン内閣は「死に体」と見られていると報道される。

1997年5月

「ナクシュバンディ教団」の指導者アハメット師はイスタンブルのファティヒ地区の金曜礼拝で政教分離のトルコ国家に対する聖戦を呼びかけたと報道された。
イスタンブルで約30万人が集まり、宗教学校の閉鎖に抗議するデモを実施した。
ここ数十年で最大のデモとされる。
トルコのサバッシュ検事総長は福祉党の解党を求める告発を憲法裁判所に提出した。
リビアからの5億ドル支援や世俗主義を基礎とする政党法に反するという理由による。
同じ理由で福祉党の前身である国家秩序党は1971年に解党された。
トルコ中央銀行は、96年1月から11月の国際収支について、貿易収支163億8300万ドルの赤字、経常収支32億7300万ドルの赤字。ただしスーツケース貿易は81億4900万ドルの黒字で、全貿易収支は82億3400万ドル、経常収支は5億6100万ドルの赤字に留まる。

ヌーン(勅令/国法), さらに地方の慣習法を体制内にとりいれた。

オスマン皇帝は,ギリシア正教徒の優れた子弟を強制的にムスリムとなした大宰相以下の軍事行政官僚とイスラーム長官のもとに法官・聖職・教育者を配した司法行政官僚の二元的制度によって支えられた。まさに中世的宗教社会に近世的政治体制を整えたといつてよい。国内のキリスト教徒やユダヤ教徒には徴税と居住区に依れば,生業の安全を保障し緩やかな支配で臨んだのである。

4. 大統領の苦悩

当初アタテュルクの共和人民の単党政治で,資本国家管理による計画経済を行ったのは,民間に産業資本はもとより,イス

ラーム社会には金融経済の基盤が存在しなかったからであろう。国内に在住する非ムスリムに依存せざるをえなかった。

トルコ民間財閥の台頭はまだ30年くらいの歴史である。

この国は,男子が兵役義務を負う国軍がアタテュルクの諸原則「ケマルイズム」の守護神的役割を果たす。戦後は政党の自由化を実現し,また民間経済を促進させたが,行き過ぎると,大統領は国軍を背景に原則にもどすことを余儀なくされた。エルバカン福祉党の解体もその路線にある。しかるにそ



デミレル大統領

表 2-2

1997年6月

エルバカン首相はデミレル大統領と会談,大統領は辞表を受領した(6月18日)。祖国党のユルマズ党首は民主左派党,民主主義者党,トルコ党との連合合意を報告し,組閣中である。

1997年7月

ユルマズ首相は国会で施政方針演説を行い,政教分離を徹底するために義務教育強化とEU正式加盟を求めた。(義務教育5年から8年に延長する法案を国会に提出した。また宗教学校の全国610校,生徒60万人の縮小と廃止を目指す。)

1997年8月

国会は,義務教育改革法案を賛成277,反対242で可決した。イスタンブルで金曜礼拝を終えた住民約2000人が教育制度改革反対のデモを行う。

1997年9月

イスタンブルで金曜礼拝を終えた群衆千人が教育改革に反対するデモを実施,警察隊がかなりの人数を逮捕した。

1997年10月

イスタンブル大学の女子学生数百人は身分証明書のペール写真使用禁止に抗議デモを実施した。イズミット湾横断橋の仮調印式が行われた。総工費18億ドルで世界第2位の吊り橋を石川島播磨重工業の日本,トルコ,英国の7社が作る。トルコ政府は全国のモスクで説教師の説教を禁止し,なおモスクがアザーンの呼びかけを行うためのスピーカー使用を禁止している。27日イスタンブル証券市場の株式指数が先週終値から11.2%下落し,1986年以降最大の下げ幅を記録した。

れに代わって美德党という親イスラーム政党が新たに誕生した(表2-3 1998.2). 政党政治のなかでイスラーム主義を止揚しなければならぬ。

5. 利子取得の禁止

最初に述べたイスラーム派のエルバカン首相が無利子銀行を設立したのは、イスラーム法にもとづく。もともとイスラームは商人組織のなかから生まれた宗教で、不

勞所得の金貸しには厳格に禁欲的であることを教祖は重視したのであろう。おそらくその埒外にあったキリスト教徒やユダヤ教徒がイスラーム社会のなかにあつて金融業を発達せしめ、今日の資本主義があるといえ、飛躍しすぎる議論だと思ふけれども、イスラーム原理主義者は、かつてイスラーム社会で許されたキリスト・ユダヤ系商業資本が今日産業資本として世界に普遍化するのには我慢ならないと見るかもしれない。古典的イスラーム法は利子取得の禁止を

表 2-3

1997年11月

1ドル = 10万リラを突破(1967年1ドル = 9リラ = 360円)
イスタンブルでイスラーム諸国55か国の相互交易の促進協議があつた。

1997年12月

97年1月から11月までの観光客は、日本から7万5570人、ドイツから約226万人、CIS諸国から142万人であつた。

1998年1月

EU(欧州連合)の加盟候補からはずれる。
イスラエルのハイファ沖で地中海のイスラエル・トルコ・米国の海軍合同演習がはじまる。
ヨルダンがオブザーバーを参加させた(1月7日から)。
親イスラーム政党の福祉党の解党判決がでた。憲法裁判所は党首のエルバカン前首相ら6人の国会議員に5年間の政治活動停止の判決を下した。

1998年2月

トルコ統計局は、97年のインフレ率が101.6%、消費者物価上昇率は92.5%と発表した。
トルコ軍の高等裁判所は過去8年間に487人の兵士を、宗教を理由に罷免したと報道、うち将校173人で幹部は約70人であつた。
トルコの人口は、6261万人で、1990年には5650万人であつた。97年11月末の国勢調査では、イスタンブル約919万8千人(14.69%)以下、アンカラ、イズミル、ブルサの順であつた。
福祉党解党判決文が官報に掲載されて、議員は無所属となつた。これに替わる、美德党(97年12月創設)に入党する者が増加している。
イスタンブル大学があごひげの宗教的服装の学生の入構を禁止したため、約2000人の学生が抗議デモを実施した。また約1万人が解党に反対してデモを行った。

1998年3月

トルコの経済活動の半分は地下経済であり、これを掌握できれば、税収の50%の増加が見込まれると大蔵大臣は述べる。強化対象は自動車や不動産の販売・購入者であるという。
カスピ海沿岸諸国(アゼルバイジャン、トルクメニスタン、カザフスタン、トルコ、グルジア)の外相会議はグルジアからトルコを経由するパイプライン構想を有力な案として決議した。
イスタンブル大学の学生約2000人が宗教的服装規制の緩和を求めてデモを実施した。
美德党の議員数が140人となり、祖国党の139人を超え、議会内の第1党となつた。

うたっている。コーランをみると、きわめて強い調子で、高利を非難する。ハディースは利子(利息)を避ける議論を盛んに展開する。しかし中東のイスラーム社会でも現実には利子は行われた。ただイスラーム法の水面下で、つまり建て前のうえでイスラーム法に抵触しないような方法がとられたという。オスマン=トルコでも、17, 8世紀に、利子の合法性がイスラーム長官の教旨において是認された。ただ利子という正式な用語をさけたようである。現在では利子の徴収がきわめて広く行き渡っているのは周知の事実といわれるが、どのような実態なのであろうか。17, 8世紀のトルコでたいへん流行した金貸しの方法は、たとえば、次のような具合であった。

『イスラームの国家・社会・法』(H. バーガー、黒田壽郎訳・解説、藤原書店 東京 1996)から引用すると、

借り手が一年間金を借り入れ、その代わりに同じ期間貸し手に自分の家を「売る」形式を取る。利子付きローンである。借り手は「買い手」からすぐにリースのかたちで家を取り戻し、現実には家賃がローンの利子となる訳である(159頁)。

スレイマンのカーヌーンでも10%を超えない利子の徴収は認められた。その方法的支持も与えたという。国家の増大する官僚機構とイスラーム的正当性への必要によって、宗教学者と官僚や民間との間に適切な均衡を保持しなければならない。今日のトルコは、外国為替の自由化はもとより、銀行・ノンバンクが資本主義経済のなかで活発に機能している。イスラーム社会は中世的タブーを合法的に脱皮すべき道を探らねばならないのではないかと考えたい。また風俗をもってアイデンティティとする時代ではないと思うのである。

98年度愛知県民大学・豊橋創造大学開放講座・講義録
講義日 1998.6.20

コラム

利子(利息)・高利貸

「アルラーは、商売を許し、高利貸は禁じたもう」(コーラン二の275:『聖クラーン』訳注三田了一、世界イスラーム連盟刊行、東京1972:53)。これに対して、ハディースの「コーラン解釈の書」49では「アッラーは商売はお許しになった、だが、利息取りは禁じ給うた」(二の276[275])とある(『ハディース』牧野信也訳、中巻、中央公論社、東京1994:526)。ハディースの「商売の書」74には、ウマルによると、預言者

コーランとハディース

は「小麦と小麦を交換するとき、互いに『ほら』と言って同時に渡すのでなければ、利息を取ることになる」云々とある(上巻:565)。同じく81に、「金を貨幣と手渡しで両替すること」と題して「アブー・バクラによると、預言者は、銀と銀と、或いは金を金と交換する場合、必ず等しくなるようにすることを命じたが、金を銀と、また銀を金とは、望むままに交換することを許した」とある(上巻:567-568)。

後記

1998年11月26日の中日新聞(夕刊)によると、ユルマズ首相は国会の内閣不信任案可決を受け、辞任に追い込まれた。再び比較第一党となったイスラーム主義政党(美德党:144議席)との間に政局は混迷し、デミレル大統領の苦悩はさらに続くにちがいない。

(1998.11.30記)